

『トレイルランニング大会のモニタリングに関する説明会』レポート

<後半>

——千葉達雄理事のよる事例紹介

(専門委員として手引き作成にも参加)

自分は「IZU TRAIL Journey (ITJ)」「ULTRA-TRAIL Mt.FUJI (UTMF)」「SPA TRAIL 四万 to 草津」のモニタリングに関わっている。現状には根本的な問題が2つある。一つはモニタリングポイントをどう決めるかということ。もう一つは評価。モニタリングを評価するという項目がないので、モニタリングをしても免罪符にはならない。そんな中で環境関係の方々とは話し、自分なりに考えをまとめたのでお話ししたい。

◆なぜ富士箱根伊豆国立公園でのトレイルランニング大会の開催は難航するのか？

大会規模が大きい事もあるが、元々の利用者が多いことが原因か？

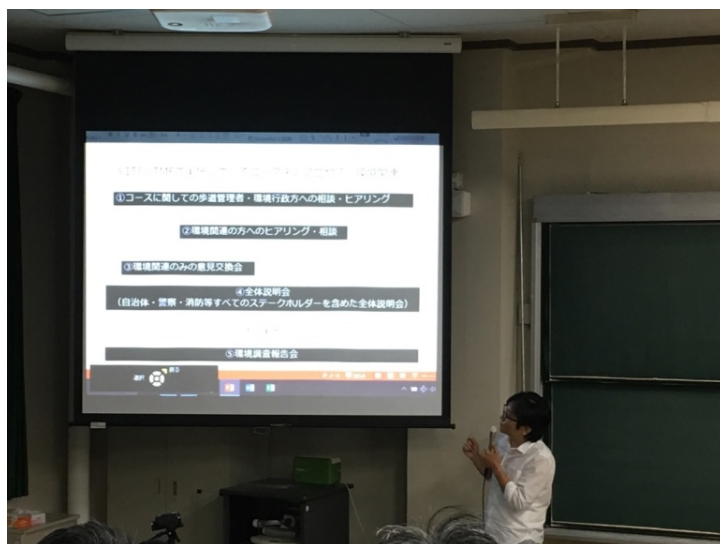
この地域だけが抱えている問題ではないが、顕在化しやすいことが挙げられる。

◆環境問題は社会問題。同じフィールドに違う価値観の人がいることは当たり前なので、二元論的な簡単な解答は出ない。

◆モニタリングとは、トレイルを共有する利害関係者が「どのような利用方法であれば、合意もしくは許容できるのか」を継続的に検討するためのツール。

モニタリング以前に大会開催やコース選定について、関係者にヒアリングやアドバイスを受けること、そのプロセスが重要。

◆地域の特性を考える順応的なプロセスやマネジメントが重要。



◆ITJ、UTMF で実施しているコース決定のプロセス(環境関連)

- 1, コースに関する歩道管理者・環境行政への相談・ヒアリング
- 2, 環境関連へのヒアリング・相談
- 3, 環境関連のみの意見交換会
4. 全体説明会(自治体・警察・消防等すべてのステークホルダーを含む)
5. 環境調査報告会

◆コース決定プロセスで行うこと

- ・モニタリング箇所の絞り込みと共有
- ・モニタリング箇所における影響の少ない利用方法の検討

◆実施例

- ・ぬかるみに箕の子を設置(ITJ)。石川弘樹さんからいただいたアイデアを実施した。
→約 1300 名通過後も、歩道拡幅はみられなかった。

・ぬかるみが生じている地点や雨天時にぬかるみが生じやすい地点、歩道の幅員が狭い地点に簡易柵を設置(UTMF)

→膝程度の簡易柵の設置により、木段部分はぬかるんでいたが、はみ出した形跡はなかった。

・洗掘が生じている地点、樹木の根が張りだしている地点に土嚢を設置(ITJ)。国立公園に隣接する国有林から土石を採取し(許可取得)、ボランティアにより、二日間で1000個の土嚢を作成して設置した。

・樹木の枝がコース上に張り出している地点は、歩道管理者の定期パトロール・支障木の除去に同行し、選定のアドバイスや作業の手伝いを実施。

●環境省への要望

国立公園内の歩道管理を行政だけでなく、民間団体が効率的に手伝える仕組みをつくってほしい。2017年に伊豆半島から民間管理型100km超ロングトレイル「IZU TRAIL」を提案予定。

——質疑応答・意見交換

参加者:ロングトレイル「IZU TRAIL」は大会ではないのか? 具体的に教えてほしい。

千葉:アメリカのロングトレイルを参考に、国立公園内でテント泊ができ、スルーハイクが可能なロングトレイルを目指している。アメリカではトレイルボランティアに民間が正規に参加している。そうした取り組みも、将来的に実現させたい。

石川副会長:モニタリングポイントは正確な場所を決めることが大事だと考えている。また、ぬかるみや洗掘など明らかに課題がある場所はレース前に予防策を講じるのがベストではないか。本来、国立公園内での設置物は許可されないかもしれないが、そのあたりは環境省にも考慮してもらいたい。

参加者(富士山エコレンジャー連絡会):自分は12年このエリアを見ている。今回のようなモニタリングは確かに大事だが、注意事項にはないような場所でも問題が起きている。事前に予測ができない場所にも、負荷がかかることがある。多くの人が登山道を利用しているわけだから、それを維持していかなければならない。

2000人以上が通るUTMFでどこが荒れるのかというと、土壌硬度が15mm以下、斜度10度以上の場所だということが調査で分かった。継続的に追跡可能な記録を残していけば、そのような基準を一緒に作っていくことはできるのではないか。

——奥宮俊祐理事による事例紹介

2015年から「Fun Trail 100k Round 秩父&奥武蔵」を開催している。そのコースは国立公園ではなく県立公園内なので、当初モニタリングは必要ないかと考えていたが、2回目から専門家(株式会社環境管理センター)に依頼して調査を始めた。



【(株)環境管理センターによるモニタリング】

◆調査概要

2015年12月に相談を受け、2016年大会で調査を実施。本大会は50km、100kmと長距離であり、すべてのコースを詳細に調査することは出来ないため、コース内9箇所を調査地点として設定し、登山道の複線化・拡幅や路面の後輩について、大会前後の変化を調査した。

◆調査地点

調査地点は全部で9箇所(武甲山下、シラジクボ、小持山下、大持山下、有間峠付近、子ノ権現〜スルギ間、天覧山〜多峯山間、鎌北湖湖畔、県民の森)。秩父市内にあるポイントについては、秩父の山岳連盟からの指摘を受けて選定した。そのほかは市内を覆うような形で設定。

◆調査日

1日で全てはできないので、事前調査に2日間、事後調査に2日間かけた。いずれの調査日も大会参加者以外の登山客等が見られた。

◆調査手法

写真撮影により記録。報告書には事前事後の写真を並べ、巻末に写真帖をつけた。

◆モニタリング結果

調査地点9地点において、一カ所をのぞいては、走行による影響は軽微だった。一方で、該当地点では走行による影響は見られたものの、登山道が崩れるまで進行した様子は見られなかった。ゴミについても、調査したコース上でゴミの散乱は見られなかった。しかし、本調査の調査地点はコースの一部である。大会開催日に降雨があったことから、調査地点以外でも部分的にぬかるみが見られ、走行により影響が見られた。大会終了後、大会主催者がすべてのコースを確認し、必要な箇所については修復対応がなされた。

——松井裕美理事による事例紹介

山梨で「スリーピークス八ヶ岳」を開催している。前出2つのケースと私たちの大会では予算が全く異なる。私たちの大会は参加者が2つのカテゴリーで750名。そのうち50名は学生で参加費を低く設定している。毎年入ってきたお金がそのまま出ていくような状況で運営している。

2017年の大会では今回のモニタリングの手引きに沿って、モニタリング地点選定のためのヒアリングを行い、環境モニタリングと利用影響モニタリングを行った。

地元の山小屋関係者や山岳関係者、山梨県みどり自然課の担当者などと協議を重ねてモニタリング箇所を決めた。これまでは分岐誘導を行った箇所を中心に選定し、2015年までは48箇所を実施していた。

その後、入山許可の担当者から「モニタリング箇所が適切でないのではないか」との指摘を受けて、場所の選定について学んできた。それらをもとにある程度場所を絞り、関係者を募ってヒアリングを行った後、最終的に11箇所を選定してモニタリングを実施した。

モニタリング調査は実行委員が複数で行うことから、使用する機器も多種になる。これらもガイドラインに沿ってすべて明記した。

天候は気象庁のHPを参考に記載。標高2500mが最高地点となる大会は国内で珍しいため、気象の変化には注意するようとの指示があった。八ヶ岳は地質的に事前に雨が降ってもぬかるむ場所はないことから、大会当日が降雨でなければ大きな問題はないとのことだった。こうした点は、行政担当者がどれくらい山に詳しいかによるだろう。山ごとに地質の特徴は異なるので、環境省の手引き通りにいかない部分もある。地元の識者などに確認するのがよいと思う。

◆環境モニタリング

- 1) 事前に 5 日間実施。
- 2) 事後に 2 日間実施

◆利用者影響モニタリング

大会前(6/11日)の7:00~12:00に三ツ頭分岐地点、または三ツ頭山頂にて実施。利用者にアンケートを行った。

- ・大会開催を知っていたか？
- ・八ヶ岳でレースがあることをどう思うか？
- ・大会の後で実施するクリーン活動に期待することはあるか？
- ・トレイルランニングについてどんな印象を持っているか？
- ・大会開催によって不都合なことはあったか？



この利用者モニタリングは、最初は面倒臭いと思っていたが、実施してみると、トレランに友好的な登山者が多いということがわかった。そして大会のPRをしていたつもりでもほとんど知られていないということもわかった。主催者が気づかないことを指摘されたので、アンケートをして良かったというのが今の正直な気持ちである。

◆映像撮影

山梨県の方から。場所によっては写真だけでなく動画での記録も残すとよいのでは、というアドバイスを受け、事前に2箇所を撮影してYouTubeで公開した。木などがなく風の浸食を受けやすい箇所。

◆課題

実行委員はすべて他の仕事と兼務で実務を行っているため、一人で事前事後の調査を行うのは不可能。そのため、さまざまなGPSやカメラを使用した。撮影場所にマーキングが残せない状況の中、機材を使い慣れている人と使い慣れていない人でズレが生じてしまった。そのためモニタリング地点が安定しなかった。利用者影響モニタリングのアンケートはコース最高地点である三ツ頭で行ったが、それが適切だったかどうかとも検討材料となった。

◆まとめ

大会直前まで残雪があり、事前の写真撮影が難しかった。それを関係者に相談し、夏のシーズンが終わった頃が一般的な状況ではないかと判断し、その時期に事前撮影を行った。雪が直前まで溶けないなど、地域ごとに自然環境が異なると思うので、モニタリング時期については地元の関係各所と相談するのがよいのではないかと感じている。調査予算や人員の確保が難しいと感じている。モニタリング調査以外の環境活動として、「森の玄関マット」や「靴底洗浄」なども行っている。

――閉会にあたって

□中尾益巳理事・事務局長

予定時間をかなりオーバーしてしまっただが、いろいろな意見が出て有意義だった。質問などあれば、終了後に個別に質問していただければと思う。

□水崎進介課長補佐

今日は手引きの説明ということで狭い話に終始してしまった。意見交換の中で、モニタリングだけではなく、登山道に影響がでない方法など、いろいろな対策をうかがえたことも有り難かった。こうした機会をつくっていただき、感謝する。今後も状況をみながら改定していきたい。

□鏑木毅会長

皆さんからいろいろなお話を伺い、重要なことは「対話」だと感じた。今後もみなで対話を進めながら、作り上げていきたいと思った。トレイルランニングの大会は「持続可能な大会」であることが大切。そのために行えることもやはり対話だと思う。またこうした機会を設けたい。